

## 実践を通して地域貢献を考える（2013－2014） 松岡拓公雄

環境建築デザイン学科、環境意匠研究科の松岡拓公雄研究室では常に現実化するものを私の活動の中から課題として取り上げ、実践を前提として学生とともに「まちづくり」、「ものづくり」ため貫でワークショップや調査、デザイン提案などに参画している。この一年間もゼミなどの演習課題をかね、市民や町民ら様々な人と出会い触れ合うことによって、自分らの身直な社会が何を求めているかを探る研究と学習の積み重ねである。同時に地域貢献の役目を負っている課題ばかりとなった。それら最近終了したものと現在進行中のものを紹介する。これらは委託研究のものもあれば、ボランティアもある。また他大学との交流も積極的に行っている。（研究室で奨励している国際交流ワークショップと東北ボランティアはゼミ生個人として参画させているので省略）

### ① 野洲駅南口周辺市有地再開発ワークショップ（2013～2014）

野洲駅南口周辺市有地再開発のあり方を立命館大学及川研究室と共同で研究し、最終的には開発の提案をする。周辺市有地と一部民有地を含む約 35,000 m<sup>2</sup> の区域を対象にし、にぎわいと活力にあふれた地域を創設するための整備構想を検討、提案するのが使命、そのために駅前検討委員会の段階から参画し、駅は交通結節点のみならず周辺地域と連携して市民の結節点となることを踏まえ、子育て、高齢者の生きがいをキーワードに対象区域全体で「心と体の健康によるにぎわいづくり」をかかげた。人のつながりで生まれるにぎわいは、心と体の健康づくりに取り組むことで実現できると考え、そのために必要な機能として、未体への資産となる市民のための広場を中心とした市民病院等の6つの機能をまとめようという方針で進めている。両大学の学生らがワークショップやインタビューを重ねて、交通量調査、マーケティング調査、ヴォリューム検討などで分析し、案を模索している段階である。

### ② ビヨンザエコワークショップ（2012～2013）

法政大学網野研究室、東京造形大学金子研究室との共同研究でこれからのエコを考える研究会。すでに国のゼロエミッションハウスなどで示されているエコハウスは環境技術と呼ばれる各業界の製品のアッセンブリーにしか過ぎない。そこで各大学の学生が18名で輪になり隣同士それぞれクライアントと設計者となり、ひとりでその両者を試み、これからのエコを考えた住宅の提案を行う企画とした。各自、自分が発注者となり、設計社に土地を与えリクエストを出す、それを受けて設計する方はそのリクエストからテーマを設定し、ビヨンザエコ住宅を提案する。関東と関西をお互いが三回以上往復、かつネット上の検討キャンパスで全員が見える状態で議論し、最終プレゼンは法政大学で行い、最優秀賞といくつかの賞を県大の学生が独占状態となった。最後にはその成果を横浜の煉瓦コートジウムで展覧会を催し公開、またブックレットとしてまとめて発行した。している段階である。



野洲駅前再開発市民ワークショップ



野洲駅前再開中学生ワークショップ



ビヨンザエコ発表審査会

### ③ 木のある暮らしスクールワークショップ (2013～2015)

林野庁の有志と法政大学との木材を普及させるための共同ワークショップ。一昨年、東京と関西でキックオフし、木に触れることの少ない学生を対象に、各地の森や木の育成、木を利用する NPO などと提携しながら、毎年地方で三泊四日程度のサマーキャンプを行うプロジェクト。毎年テーマを変えていき 10 年続けることを目標にしている。昨年は山梨県の東京との境の源流にあたる小菅村で開催、テーマは「木と水」、講師は全国からその関係の専門家を 6 名招聘、森のエクスカージョン、講義やワークショップを取り込んだプログラムにそって進めた。その企画で幾度か東京との往復をしながら学生らと密度を高めて行った。今年は北海道の新得町でテーマは「木と食」。来年は熊本の予定でテーマは「木と火」、参加者は学生、社会人、我々スタッフで 50 人ひとクラスとなる。

### ④ 大津湖岸水辺研究会ワークショップ (2014～2017)

昨年、村上教授により大津市の湖岸活用プロジェクトが企画され、大津市での水辺を考えるシンポジウムで建築家の伊東豊雄氏や同僚の建築家芦澤准教授らのパネルディスカッション、三回生前期の課題を活用した作品発表会、展示などが催され、湖岸の関心は高まっている。私自身も景観審議会会長として草津市との景観共同宣言や景観の新近江八景ルールの作成などに関わっているが、あらたに市職員、まちづくり会社の方や、地元の賛同者が集まり水空間デザインプロジェクト会議が立ち上がった。私はその実戦部隊としてサブリーダー役で水辺の活用方策の検討を進めるにあたって、学生を主体とした「水辺研究会」が発足した。共同研究者は西安造形大学の石川教授とその学生たち。これは今後 3 年間で成果をあげる予定。

### ⑤ 西の湖回遊路計画ワークショップ (2012～2015)

安土町が 2011 年に近江八幡に合併し、地理的に西の湖は近江八幡市の中に取り込まれた。現在「よし笛ロード」というサイクリングのための道があるが活用されていない。この道を利用し、西の湖の保存活用を視野に入れた新たな観光ルートに取り込み、街全体とリンクさせ回遊路を造ろうという研究。修士設計で院生の田口がそれをまとめ、市や商工会議所に提案してきたが、近江八幡市からの要望と合致し、今期の「COC プロジェクト」に採択された。現在、かつ未来にむけて進行中である。拠点にファブラボやアートイベントプレイス等を組み込んだ絵巻物を作成、全体模型等を製作し、具体的な実現に向けて進めている。



木のある暮らしサマーキャンプレクチャー



水辺研究会ワークショップ



甲賀市庁舎整備子ども議会議員ワークショップ

## ⑥ 愛知川宿交流施設／旧近江銀行再開発ワークショップ (2013～2016)

---

愛知川宿には宿街道の中心にある本陣跡の横に昭和初期に建設され、殆ど利用されなかった疑似西洋風の旧近江銀行の建築が残っている。この建築を保存活用して交流拠点とする計画を愛荘町から委託された。建築実測調査、周辺FW、町民インタビュー、数回の間隔発表などを続け、提案に向けて現在進行中。また愛知川町には、唯一、県の郡役所が残っている、建築的には京都工繊大の石田潤一郎教授によると、エポックメイキングな建築ではないが記録として残すことに価値があるという。この建築の保存活用については12年前に一度提案しているが、これも広域の再生のなかでひとつの核として再度提案して行きたい。

## ⑦ こどもクリニック内装パノラマワークショップ (2013～2015)

---

近江環人の関係でプロデュースデザイナーの方から依頼を受け、大阪に開業するこどもクリニックの院長からインテリアを学生に考えてほしいというもの。特定の個人クリニックの依頼は社会に還元できるかと判断し、多く子ども達へのメッセージを伝える良い機会と考え、3週間にわたり、アイデア出しから現地での作業など、ゼミだけでは終わらず一回生から学年を超えた協力で完成を見たが、こういうプロジェクトを大学生にはどうかと疑問もあったが、完成したものは絵としてまた形として完成度が高く、こどもたちの病院の不安を取り除き、元気になって帰って行くような空間が出現した。これはデザインのパワーであると学生たちの貢献度は大きかった。

## ⑧ 八坂集落空き家対策プロジェクトワークショップ (2013～2015)

---

建築の学生らによってすでに近江楽座でも「えこみんか」「豊郷かいぞうプロジェクト」等で各集落の空き家の利用で学生らが参画し、補修、改修を行い下宿に、集会所やタルタルーガのようにカフェバーも出現している。空き家問題は人口減少を背景に深刻な問題となってくるのは必然、その空き家対策の研究のひとつとして、大学の脇の八坂集落に焦点を当てた。今まで横にありながらその活動はわずかしか見られなかった。大学との共存共栄を計るために、空き家等の実態調査からはじめ、この地区の長老らのインタビュー、学生の希望などを整理し第一段階として院生の米田君が修士設計としてまとめたが、八坂に詳しい上田先生の研究と合致していたので、松岡研究室でそれをサポートする格好で次年度も進めていき、さらに具体的な提案をしたいと考えている。これも彦根市の空き家対策研究のリクエストに応え、「COCプロジェクト」に採択されている。



愛知川町交流拠点ワークショップ (調査)



こどもクリニックワークショップ



気仙沼域学連携事業

⑨ 丹下健三生誕百年展展示ワークショップ (2013～2015)

私が丹下健三を師として9年ほど彼の建築研究所に所属、その後独立し（アーキテクトファイブ＋アーキテクトシップ）、1999年に県大に就任すまでは丹下の影響下にあった。丹下は遺伝子を渡した弟子達を数多く残したが、建築学科のある大学に就任下建築家も多い。丹下健三は展覧会を嫌った、それはまだまだ先のことと、いつも考えられていたからである。没後生誕百年を記念して残された建築界の名だたるメンバーと出身地である香川県が企画を立ち上げ現在、現役で研究室のある我々に模型制作の白羽の矢が立った。全て木でつくるという保存を目的とした模型制作には各研究室学生全員でかからないと完成しない大物ばかりであった。私は彼の戦争前の昭和17年の建築学会コンペで一位になった「大東亜忠霊神域計画」のアンビルドの模型、これは余りにも壮大な計画で日本の精神を皇居と富士山をつなぐ軸線上に計画したもので今見ても日本のデザインを考えさせられる力がある。これを限られた予算で、しかも木製で制作、大きさは畳み三枚分の敷地となり、学生達は連続徹夜で仕上げ、展覧会には間に合った。この模型制作を通して、彼らは地域を越えて「日本」的なるデザインを考えるいい機会になった。

⑩ 近江八幡松明まつりワークショップ (2012～2030)

近江八幡では古くから伝統的な松明祭りがあり、春の三大火祭り（3月左義長まつり、4月八幡まつり、5月篠田の花火）があるが、松明祭りはばらばらと区域ごとに開催されており、全国的にはあまり知られていない。そこで区ごとの松明を一堂に集めて、「新たな祭り」として定着させようという試みである。研究室では対外的にアピールする観光デザインとしてとらえ、二年前から参加している。学生らも伝統的な松明のつくり方を学びながら自分たちのオリジナル松明を発表する、制作の過程で竹、西の湖の葦や菜種の殻を使うので、地元の方々との交流が生まれ育ちつつある。

この一年随分と動き回った。ここには記していないがマスターアーキテクトとして学内自転車置き場のコンペや新たなサイン計画、気仙沼での域学連携事業、近江環人関連事業など、国際ワークショップなど個人として関わる活動も多々あり、振り返ってみると地域貢献型のプロジェクトの多く関わってきている。共通して言えることは一人で何もできない、学生や教員、自治体職員、地域の方々との交流の中で見えてくるものは東北の震災の後、よく言われている「絆」と「ビジョン」である。人との理解あるつながり、チームワークは物事が進む原動力であり、金銭的な解決を超えた力がある。もうひとつは共通の明快な目標を定めたバックキャストという思考法である。この私の指導する学生らは自分たちのアイデアを実現させるために、実践を通してこの「デザインマインド」を学んでいると信じている。



丹下健三生誕百年展模型制作完了風景



松明祭りワークショップ



松明祭りワークショップ